

6 / 16 「イエスの焦点と再臨の約束」(使徒1:9~14)

長谷川 望 牧師

- * こう言うてから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。(使徒1:9) 主イエスの昇天は復活と聖霊降臨の間にある大切な出来事である。イエスはオリーブ山から天に昇り、見えなくなった。「天」とは神がおられるところであり、イエスは元々神であられる方なので、元居たところに帰られたのである。宇宙空間のどこかに転居されたのではない。「雲」は、出エジプトのときイスラエルの民を雲の柱が守ったように、神の臨在を表すものである。弟子たちは昇天のようすを見ていた。神は弟子たちに対して、イエスが天から来られた方であると同時に、再び同じ姿で来られることをしっかりと目に焼き付くように視覚教育をされた。
- * 昇天のあとイエスは「全能の父である神の右に座しておられます。」と使徒信条で告白する。神としての力を持ち、天と地を支配されるイエスが私たちに対してされることは、だれが、私たちに罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。(ローマ8:34)とあるように、罪ある私たちを弁護し、罪ないものとしてとりなして下さっているのである。
- * そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」(使徒1:11) イエスは昇天と同じ姿で再びおいでになることがみ使いたちから約束された。それがいつかはわからないが、必ずあることは聖書の多くの個所に述べられている。イエスは、今度は「生きている者と死んでいるものとをさばかれる」ために来られるのである。そのさばきは「いのち組」と「滅び組」とに分けられる。イエスを救い主と信じて「いのち組」に入りたいものである。
- * 「彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。(1:14) この10日後に聖霊が下るが、彼らはそれを待ち望み、また、主イエスが再び来られるのを待ち望みながら熱心に祈る群れとなった。